
恋するクジラ

羽衣石

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

恋するクジラ

【Nコード】

N0529Z

【作者名】

羽 衣石

【あらすじ】

森里螢一とベルダンディーの勤めるバイクショップ、ワールウィンド。オーナーである藤見千尋は気風がよく、心配な人がいれば放つてはおけない性分なのである。そして彼女の大胆な行動のお陰でベルダンディーははらはらさせられることとなり……。

「行くわよ」

築三十年ほどの木造アパートの、二階に上がる外階段を上る手前で藤見千尋は連れの女性に声をかけた。

数日来気温が下がり続け、いよいよ街が冬を迎えようかと思われたが不意に訪れた暑い日であった。全国的に再び気温が上昇し、千尋は作業用ツナギの袖を腰で結びつけ上半身は टीーシャツ一枚になっていた。抜けるような青空を雲が風に乗って流れていく。快晴の平日に古ぼけたアパートの前で千尋が意気込んでいるのは、それが彼女の仕事に関わるからである。であればこそ、従業員の女性を同行させているのであった。

振り返った千尋が、後方に立つワンピース姿の従業員に向かってもう一度声をかける。

「行くわよ、ベルちゃん」

「……はい」

その女性はいささか困惑した表情で立っていたが、千尋が軽快に階段を上がって行くのを見るとそれでも静かに後をついていったのである。彼女は千尋に雇われて労働に対する報酬を受け取る身であり、そうである以上余程不当なものでない限りは雇用主の指示命令に従う義務が生じることになる。

例え彼女が人間ならぬ女神であったとしても。

「ちょっと森里くん、小椋さんから連絡無いの？」

猫実市を縦断する国道から住宅地に入った所に店舗を構える自動二輪専門店ワールウィンドで、従業員の森里螢一が藤見千尋から声

をかけられたのはその日の昼前のことだった。ガレージで朝から取り掛かっていた修理を終え、午後から部品と修理器具の発注をかけるべく棚の整理を始めた矢先のことであった。愛車の大型サイドカーで外回りから戻った千尋が、ヘルメットを脱ぎつつガレージに入ってきたのだ。

「小椋さん？……ああ、あの二五〇のネイキッドを預けてる人ですよね」

螢一がガレージの奥を見ながら返事をした。そこにはビニールカバーを被せた国産ネイキッドタイプのバイクがあるのだが、持ち主に修理の完了を報告してからすでに三週間近くが経過している。

「そう言えば電話をかけた時は留守電だったから、小椋さんと話したのはバイクを引き取りに行った時が最後ですね」

「その後かかってこなかったの？」

「いや、俺は受けてないスけど」

「参ったなあ……ちよつとお、ベルちゃーん」

そう言いながら千尋は事務所の方へと駆け込んでいった。どうもトラブルの起こりそうな予感がするが、森里螢一は決して動じることはない。大学を卒業して間もない年齢であるが、それでいて落ち着いた感じを醸しだしているのは経験によるものである。実際彼は大学在籍中から凡そ一般的な人間が経験することのない様々なトラブルを経験してきた。その結果通常業務で生じる程度のトラブルではうるたえることなくその処理にあたっているため、雇用主である千尋から予想外の高評価を得ていたのである。

螢一が壁の時計を見ると十二時を少し過ぎていた。ガレージ内で工業用石けんを使って手を洗い事務所に戻ると、千尋はすでにカウチに腰掛けて出前の丼物を食べようとしていた。食事を前にして少しは落ち着きを取り戻したようである。

「螢一さん、お弁当にしましょう」

そう声をかけてきたのは、この店の事務員兼雑用係である亜麻色の長い髪をもつ女性である。名はベルダンディーと言う。彼女を知

る全ての者は、ベルダンディーがいずこかの国から来日して暮らしている外国人であると思っっている。しかしながらそうではない。彼女は天上界からやってきた女神であり、誰あろう森里螢一の願いを叶えるべく人間界に降臨し、そのまま居ついてしまっているのだ。それはつまり森里螢一が「君のような女神にずっとそばにいてほしい」などと言う願い事をしてしまった結果なのであるが、以来一つ屋根の下で寝食を共にし同じ学舎で講義を受けあまつさえ同じ職場で勤務する関係となったのである。

ベルダンディーと共に暮らすことで螢一はいろいろと苦勞を背負う羽目になったのだが、それに勝る大小様々な幸福を日々味わっているというのが彼の日常なのである。だから顧客との連絡不通という事態も、こう言っただけは何だが彼にとってそう大きな問題ではなかった。

「で、ベルちゃんも小棕さんからの連絡は受けてないのよね？」

「はい、記憶にありませんけど」

「あなたが覚えてないってことは連絡無いつてことよね」

そう言っただけ千尋は熱い緑茶をすすった。

「小棕さんって、支払いを滞納したことあったっけ」

弁当のおかずを口に運びながら、螢一がベルダンディーに尋ねた。「いえ、去年は三回と今年は春先に一度整備を依頼されましたけれど、お支払いが遅れたことは一度もありません」

ベルダンディーは開店以来の来客数や売上高を明確に覚えているのだが、その程度のことでは驚く人間はもはやこの店にはいない。

「支払いの話じゃなくてね」

千尋が口を開く。

「小棕さんね、うちにバイクの修理を頼んだ少し後に職場に二週間の休暇届を出したそうなのよ」

「休暇って、ツーリングならバイクが直ってからでしょうに」

「何かすごく急なことだったみたい。しかもね、届出の日が過ぎても出勤してこなくて自宅も携帯も連絡がつかないんだって」

「失踪ですか？」

ベルダンディーがそうつぶやくのを聞いて螢一の顔にもさすがに緊張が走った。よもや警察沙汰にまで話が進むとまでは思っていなかった。

「このままだと職場の方でも警察に相談しなくちゃいけないって話になってるみたいよ、小椋さんってどうも親戚とか身寄りがないらしいのよね」

そう話す千尋に螢一が質問した。

「小椋さんの会社って？」

「会社じゃないわよ、猫実臨海水族館。あの人学芸員だそうなんだけど、何でも鯨に関しては結構な権威らしいわよ」

「鯨ねえ……」

そう言われて螢一はあらためて小椋の姿を思い浮かべた。と言ってもあまり深い印象も無い。バイクの修理依頼を受けて何度か顔を合わせてはいるが、小椋はもともと所有するバイクを移動手段のひとつとしかたらえていないような人物である。愛用の古いネイキッドも知人から無償で譲り受けた物だとのことで、バイクについてあまり語らない彼は店の常連客としては少数派であった。だから螢一は彼について姓と乗っているバイクしか知らなかった。

「大学で海洋生物の研究しててアメリカに留学したこともあるそうだし、一時は専門の研究機関に在籍してたんですって」

千尋の話聞きながら、螢一は猫実臨海水族館に勤めるもう一人の常連客のことを思い出した。イタリア製バイクを偏愛するその人物がおそらくは千尋の情報源なのであろう。

「とりあえずこれから小椋さんのアパートに行ってみるわよ、何か手がかりが見つかるかもしれないし」

どうやら千尋は本気で失踪人探しに乗り出す気らしい。

「森里君は部品の発注もあるし店番しててちょうだい。ベルちゃん、

わたしについて来てね」

「え、わたしがですか？」

「そうよ、いつもいつも森里君と一緒に出かけるもんだと思ったら大間違いなんだから」

そう言われて螢一は頬をひくつかせ、ベルダンディーは困った表情を浮かべる。

「千尋さん、わたし何か悪い予感がするんですけど」

ベルダンディーの心配に千尋は人差し指を軽く振って応えたのである。

「ベルちゃん、この世には不思議なことなんて何ひとつ無いのよ」
知らぬこととは言え女神相手にそんなことを言う人間はそうそういないだろう。螢一はため息をつきながら千尋にひとつ尋ねた。

「何でそんなに小椋さんの心配をするんですか？」

「だって修理代もえなかつたら困るじゃない」

結局それなんだ……螢一は自らの雇い主の性格を改めて思い知らされた。

千尋が小椋のアパートのドアを軽くノックする。返事は全く無い。新聞や郵便物はたまっておらず、電力メーターはわずかずつ回転を続けている。事前に千尋が大家に電話をかけて確認したところ、小椋本人からしばらく留守にする旨の連絡はあったとのことであり、前月の家賃は口座からきちんと引き落とされたそう。しばらく待って再度ドアをノックしたが、やはり何の反応もない。

「たしかに留守みたいだけど、なんか妙ね」

女神であるベルダンディーには、今まさに千尋の感性が鋭く研ぎ澄まされているのが手に取るようにわかる。人間として相当な能力の高さを持つ者にベルダンディーは驚愕と尊敬と念を禁じえないのであったが、それがあはれいはこの事態に拍車をかけるのではないかと気が気でない。

「千尋さん帰りましょうよ」

その言葉に千尋は口を尖らせる。

「だめよ、この妙な感じの正体を確かめないと」

そう言っってポケットから取り出したのは、複雑に歪められた細かい針金であった。

「まさか千尋さん……」

「ちよつと人に見られちゃまずいからね、ベルちゃんすっかり見張っつてて」

そう言いながら千尋は針金を鍵穴に差し込むと静かに動かし始めた。その表情に一層緊張が走る。

「いや、千尋さん、その……」

ベルダンディーもまた緊張の面持ちを浮かべるが、千尋のそれとは意味合いが異なる。女神は既に気づいているのだ。この木造アパートは古いとは言え、防犯については殊の外嚴重なのである。大家自身がオートバイの愛好家であるため駐輪場には盗難防止の策が整

つており、小椋が住居にこのアパートを選んだのはそれが理由だったのである。そしてこの留守の部屋もホームセキュリティが機能している。これ以上千尋がピッキングを続けられればじきに警備会社へ通報が行くであろう。

仕方ない

ベルダンデーはそう決心すると千尋に聞き取れぬ程の小さな声で^{スベル}法術言語を詠唱した。部屋を監視する電流の目が遮断され、同時にドアの施錠も解かれた。そうと知らぬままカチリと軽い音が聞こえると、千尋は快心の笑みを浮かべたのである。

「やったね。さ、ベルちゃんは入るわよ」

ドアを開けて堂々と入室する千尋に続いてベルダンデーもおじやましますと言いながら部屋に入った。玄関からすぐのキッチンスペースを通り抜け、その奥にある六畳の和室へと足を踏み入れる。

千尋は妙な気配を感じているようだが、ベルダンデーはそれ以上に室内に何者かの存在を感知している。一体何者なのか、天上界の神属にあつて高位に遇される一級神二種限定解除の女神であるベルダンデー相手にこれほどまでのフィルタリングをかけてみせるとは正直驚いている。それが仮に魔属であつたのならかなりの実力者である。だからこそベルダンデーは早々に千尋を連れ帰りたかつたのだ。

「何か、ずいぶんとこざつぱりしてるわね」

部屋は確かにきれいに片付いていた。ベルダンデーは同居している螢一の部屋をよく掃除するが、それほど散らかさない性質^{たち}であるとは言え螢一もここまで普段から部屋をきれいにはしていない。とても男性の一人住まいとは思えなかった。そしてベルダンデーが透視能力を使って気がついたことなのだが、テレビ台の裏側や収納家具の陰にあるコンセントは全て外されていた。余分な電気を消費しないためののだろうか、二週間程度留守にするからと言ってそこまで徹底するものなのだろうか。

「海洋モノの映画とドキュメンタリーのDVD……小椋さんって結^{ディーヴァイデー}

構アニメも見てんのね」

千尋が室内をつぶさに観察している。さすがに引き出しや押入れの中までは物色していないが、何を見つければ納得して帰る気になるのだろうか。

「千尋さんやつぱり良くないですよ、早く出ましょう」

「何かスケジュールとか書き残した物がないか探してみて」

仕方なしにベルダンディーも、何か千尋が気の済むような物を探すことにした。故に台所で影が浮かび上がり人型を成すのに気がつかなかった。その影もまた気づかれぬように静かに実体を現していた。細腰の女性であった。その女性はスカートをめくり上げ、左足の太腿に巻きつけたホルスターから口径九ミリの拳銃を抜き取って構えたのである。そして目を閉じて深く息を吸い、一気に隣室に飛び込んで銃口を向けた。

「動かないで」

だがその声を聞くや否やベルダンディーは獲物を追う猫が如き俊敏な動きでその女性の前に飛び込み、右手を伸ばして拳銃のスライドをつかんだ。瞬時に攻撃手段を封じられた女性が啞然とするその顔を見て、今度はベルダンディーが驚いた。

「アンネローゼじゃありませんか！」

「ベルダンディー？あなた一体何してるのよ？」

「え……あ、な、何よそれえっ？」

振り返った千尋が体のどこかに穴でも開いたような大声を上げた。不意に現れた人物が意外にも知己であったためベルダンディーは驚いていたのだが、それが千尋の目には拳銃を突きつけられて恫喝されているように見えたのだ。

「ちよつと、ベルちゃんから離れなさい」

相手が拳銃を所持していることを認識して尚、千尋はふたりの間に割って入りベルダンディーをかばおうとした。その勇気は賞賛に

値するといふべきなのであるが、状況を更にややこしくしてしまつたこともまた確かである。

「危ないって、撃たないから……撃たないから落ち着きなさいよ」
こついつた状況に遭遇することは日本国内ではあまりないことなので、数々の修羅場をかくぐつてきた感じを相当に匂わせる千尋とは言え拳銃を前にしてはさすがに冷静でいらなかったようだ。
相手が引金から指を抜き両手を挙げてみせても、千尋は抵抗をやめなかった。

「あなた一体何者よ、何でこの部屋に忍び込んだのよ」

「何言つてるのよ、侵入者はあなたたちの方じゃないの」

「千尋さん落ち着いてください、わたしなら大丈夫ですから」

ベルダンディーが説得しても、すっかり興奮してしまつた千尋をなだめるのははやできなかった。

「ええいもうっ！」

アンネローゼと呼ばれたその女性は、業を煮やしたかのように声を上げるといきなり千尋を抱きすくめた。そしてあるう事が自らの唇を千尋のそれに押しつけたのである。

「っ！」

眸を見開き、頬を朱に染めて千尋は驚き、しばし抗っていたが急にとろろんと表情を緩めて無抵抗になつてしまった。アンネローゼは更に千尋の唇を舐ぶり、ねじ込んだ舌を口腔の内側に這わせていく。ベルダンディーは両手で口元を押さえ頬を朱に染めながら、その様子を呆然と見守っていた。

「っふう」

やがてアンネローゼが解放すると、千尋は喜悦の表情を浮かべたままふらふらと立っていた。

「悪いけど、この人の記憶抜かせてもらつたわよ」

ベルダンディーは千尋のそばに近づきその手を取つた。どうやら恍惚状態トランスになつているようだが、誘導すればついて歩いてくることはできそうだ。

「あの、アンネローゼはもしかして……」

「そうよ、この部屋の住人小椋繁はわたしの契約者。そして彼は不在、今すぐ会わせることはできないわ」

ベルダンディーは用意していた請求書をおずおずとアンネローゼに差し出した。それを見てアンネローゼは長いまつ毛を動かして驚き、ため息と共に肩を落としたのである。

「何で女神が女神に人間の支払いを請求しなくちゃなんないのよお」
状況のあまりのばかばかしさにアンネローゼは脱力し、ベルダンディーは当惑するしかなかった。

「いいわ、今夜あなたの家に払いに行くから。とりあえず今はこの人連れて帰ってくれないかしら」

そう言われてベルダンディーは千尋の手を引いて部屋を後にした。階段を降り駐輪場まで千尋はベルダンディーに指示されるままふらふらと、それでもつまづくことなく歩いたのだった。だがそこから来てベルダンディーはあること気がついてまたも当惑してしまった。そして十五分後、店で留守番をしていた森里螢一は驚いた。千尋の大型サイドカーをベルダンディーが運転して帰ってきたからである。

今夜、知り合いの女神が訪ねてきますから

ベルダンデーにそう言われて、森里螢一はそれ以上の詮索はしなかった。千尋が妙にフェロモンを放出しているので仕事を早々と切り上げて帰宅した。自室で夕食ができるのを待っていると玄関の木戸を叩く音に気がついた。

そそくさと立ち上がると小走りに玄関まで移動し、どうぞと言いながら木戸を開く。目の前には長い濃金髪に切れ長の双眸、アッシュブロンド 軀幹をくつきりと表しながらも袖や襟から肌を露出させることのない紅いドレスのような服を身につけた美しい女性が立っていた。昔読んだSFマンガのヒロインみたいだなあと螢一は思ったのだが、その瞬間こめかみに銃口を突きつけられたのである。

「あなた、森里螢一くん？」

張りのある美しい声でそう問われて、拳銃さえ視界になければ螢一は鼻の下を伸ばしてしまったかもしれない。

「マーラーとか言う魔属がこの街に居ついてるらしいけど、まさかそいつが変装してるなんてことないわよね」

「もしそうだったら？」

「七・六二ミリの小銃か十六番の散弾銃、お望みなら六〇ミリの無反動砲でも何でも今すぐぶっ放す」

「……俺は森里螢一に間違いありません」

「うん、わかってるんだけど一応ね」

そう言いながら拳銃を腰にしまうと、代わりに名刺を差し出した。「わたしはお助け女神事務所の一級神アンネローゼ、ベルダンデーたちとは旧知の仲よ。驚かせてごめんなさい」

そう言つとアンネローゼは、立ったまま痙攣する螢一を尻目に玄関を上がつていった。

「わあ、久しぶり」

「何よ、仕事で来てんの？」

そこへ廊下を通りかかったベルダンディーの妹スクルドと姉のウルドが声をかけたのだが、ふたりとも螢一の様子には目もくれないのだった。

「まあね、実はあなたたちにちょっと頼みたいことがあって」

奥からエプロン姿のベルダンディーも姿を現しアンネローゼを出迎えた。

「いらっしやい、ちょうどお夕飯ができあがったところですので一緒に食べていってください」

そうして四にんの女神は居間へと向かったのである。が、アンネローゼはふと振り返り螢一に向かって微笑みながらこう言った。

「螢一くん、ベルダンディーと仲良くしてやってね」

笑顔と共に光の粒子が飛び散るかのようなようであった。あの顔で言われたら人生賭けちゃう人もいるんじゃないかなあ……特に根拠はないが螢一はそう思ったのである。

ご飯にシメジの味噌汁、メダイの塩焼きに厚揚げと水菜のあんかけ、ささ身とレタスのサラダにデザートには林檎と柿。ベルダンディーの用意した夕食はいつもの料理であった。わざわざ純米酒を買ってきたウルドの方がむしろ客に気を遣っているかのようなのである。

アンネローゼが金髪をかき上げながら器用に箸を使って魚の身をほぐしていく。螢一はアンネローゼの物静かな仕草について自分の手が止まりそうになる。決まってそんな時にはアンネローゼの方が一瞬、まさにほんの一瞬だけ微笑みかけるのだ。まるで狙撃のように微笑みについどきどきしてしまう。

「螢一さん、おかわりは？」

この不意打ちは決して狙ってのことではないのだろう。

「ごちそうさま……ふふ、ベルダンディーの家庭料理を食べられるとは思ってなかったわ」

食事を終えたアンネローゼが口元をハンカチで拭きながらそう言った。

「調理師の神格取得のためにお料理練習してたところはすごい物ばかり作ってたものね」

「いいじゃないですか、その話は」

アンネローゼの言葉に赤面しながら、ベルダンディーは食器を下げていった。

「そう言えばそんなこともあったわね」

「えーっ、そんなのわたし知らないよお」

アンネローゼのグラスに酒を注ぐウルドをスクルドが問い詰めた。

「あんたがまだ父さんたちと一緒にあつちに居たころの話よ」

螢一ひとりが話を飲み込めずぼかんとしていた。

「一級非限定神の称号を得るにはありとあらゆる神格を取得しなくちゃならないんだけどね、あのころベルダンディーが作ってた創作料理は幹部神の皆さまにも大絶賛されてたのよ」

「そうなんですか、ここではいつも普通の家庭料理ばかり作ってますよ」

「だからわたしびっくりしちゃった」

アンネローゼの口から語られた過去の出来事に、螢一は意外さを禁じえないのであった。

「さて、仕事の話しようかしら」

そう言いながらアンネローゼは一枚の封筒を取り出して螢一に手渡したのである。

「小椋が居ないから代わりにお支払いするわね、バイクの修理代よ。あ、バイクの方は悪いけどもうしばらく預かっておいて」

螢一はその封筒を厨房から戻ってきたベルダンディーにそのまま手渡した。中身を確認してそれをエプロンのポケットに入れると、ベルダンディーはアンネローゼのそばに膝をついた。

「あの、それで……」

「小椋なら旅に出てる、それが彼の願いだったから」

眉間に少しだけ皺を寄せながら、アンネローゼはベルダンデーの問いに答えた。約一ヶ月前、小椋繁のかけた間違い電話は天上界のお助け女神事務所につながり一級神アンネローゼは彼のもとへと降臨した。あなたの願いを何でもかなえます、ただし一つだけ……アンネローゼがそう言うのと小椋はしばらく考え込み、やがて小さくつぶやいたのだそうだ。

「広い海を自由に旅したい、か。海洋生物学者らしいお願いね」
ウルドが自分のグラスに口をつけながら感想を述べた。

「え、でもちよつと待ってよ。その小椋って人、休暇は二週間しか取ってなかったんじゃないの」

アンネローゼが来る前にベルダンデーが話していた内容を、スクルドはどうやらしっかりと覚えていたようである。アンネローゼがその問いにすぐさま答えた。

「ええ、彼も休暇の取れる範囲内ですってことで納得してたわ。でも、それから更に二週間経っても彼はまだ帰ってこないの」

「まさか事故にあつたんじゃない……でも、アンネローゼさんも女神なんだから小椋さんの行方がわからないなんてことないでしょう？」

螢一にそう言われてアンネローゼは一瞬だけならむような目つきで見返したが、すぐに反省したように首を横に振った。その様子を見て螢一はしまったと思つたのだった。彼は女神たちの力をよく知る人間である、アンネローゼが小椋の所在をつかめないのはつまりそれなりに理由があるからに違いない。

「天上界を通じて彼の位置を知ることができるの。でもすぐにそこまで行くことができないし、どうにも彼の移動速度が速くって」

「一体どんな船を用意してあげたつてのよ」
スクルドの関心はどうやらそちらの方にあるようである。アンネローゼは苦笑しながらウルドの方に向き直った。

「それでね、あなたたちに協力を頼みたいのよ。今夜の潮の流れを考えれば、小椋は小笠原の姉島周辺まで戻ってくる可能性が高いわわたしと一緒に上空から彼を探してほしい、今夜こそ絶対に連れ戻

したいの」

小椋繁と音信不通になってしまっている状況に一番焦りを感じているのは、やはりアンネローゼほんにん本神のようである。ウルドは黙ってアンネローゼを見返していたが、意気揚々と立ち上がったのはスクルドの方である。

「まっかせて、こんなこともあるのかといい物作ってあるんだから」

シーグルう準備手伝って、と自作の美少女型ロボットを呼びながらスクルドは居間から駆け出して行った。その後姿を見てウルドはやれやれという顔をする。返答を留保してはいるが断ろうと言うのではない、ただひとつアンネローゼに問い質したいことがあったのだ。

「彼が帰還を拒んだら、その時はどうするつもりなの？」

「何言ってるのよ、戻らずに済むわけがないじゃない」

返答はすいぶんあっさりとしていた。ウルドもそれ以上追求はしなかった。ベルダンディーが口を開こうとする前にウルドは立ち上がり、アンネローゼを静かに見据える。

「いいわ、協力する。あんたとあたし、それにスクルドの三神さんじんで行けば十分よね」

「姉さん、でもそれでは……」

「ベルダンディーは螢一と留守番してなさい、それにスクルドの乗り物にはそんなたくさん乗れないと思うわ」

その時、庭の方からスクルドが呼ぶ声が聞こえた。何を組み立てたものか、螢一は気になって駆けるように居間を出て縁側に向かう。そして、住居としてある寺の広い庭に鎮座する乗り物を見て啞然とした。

み、見覚えがある

それはまさしく気球であった。球皮は縫い目ごとに白をはさんで五色に彩られ、ゴンドラには本当に必要かと思われるほど多数の機器やレバーなどが見える。バーナーらしき物が見当たらないが、ま

さかガス気球なのだろうか。さらに胴体部には二本の作業用マニピュレーターと離着陸用の三脚、そして用途の全くわからない渦巻きを描いた円盤が取り付けられていた。

すでにゴンドラへと乗り込んでいたスクルドが、自慢げに声を張り上げる。

「いい感じで風が吹いてきたわ。さあ出発するわよ、わたしが作ったこの……」

「言っちゃダメだーっ!」

螢一の絶叫にかき消され気球の名はよく聞こえなかった。ウルドとアンネローゼが乗り込むと、スクルドはハンドルを回しレバーを上下させた。気球は音もなくふわりと浮き上がり、あっという間に猫実市上空へと舞い上がっていったのである。

かくして女神たちを乗せた気球は風をつかまえて、えいえいおうとばかりに小笠原諸島へと向かったのであった。

chapter・03 (後書き)

続きは翌朝！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0529z/>

恋するクジラ

2011年12月7日07時47分発行